

## 小さな悪の物語

—グリム童話「お墓へはいったかわいそうなこぞう」(KHM185)をめぐって—

● 金 成 陽 一

### 1. いじめの麻痺

グリム童話「お墓へはいったかわいそうなこぞう」(Der arme Junge im Grab: KHM185)はユーモアに満ちた小品ではあるものの、小僧が死ぬつもりで旦那の葡萄酒を飲み墓穴に横たわる結末は何ともやりきれない。死を前にしてまるで何を恐れるでもない彼の気楽な態度は、こんな風に明るく死ぬのなら死も満更嫌なものではないかなと思わせるほどだ。酔った小僧はフラフラしながらも己の死期を悟って墓地に行き、穴に横たわった。つまり、酒に何の抵抗もない子供が一気飲みをした結果、急性アルコール中毒になり命を失ったということなのだろう。小僧の最後の場面をテキストは実に遠回しに言い表しているの、一度読んだだけだとひょっとして主人公がまだ生きているのではないかと誤解しかねない。

「だんだん、気がとおくなっていきました。近くにお料理屋があつて、そこに御婚礼のおいまいのお客があがっていました。その音楽をきいていると、自分はもう極楽にいるような思いで、やがてそのうちに、正気がなくなりました。かわいそうに、こぞうはそれぎり目がさめません。つよいぶどう酒の灼くような熱と、夜のつめたい露とに命をうばわれたので、こぞうはいつまでも、じぶんではいりこんだお墓の中にいました」<sup>(1)</sup>

いつも腹を減らしていた小僧はお料理屋や御婚礼の場において、音楽につつまれながら既に自分が極楽に入る様な気分で死んでいく。何をやっても主人にさんざん殴られ、苦労続きの人生ではあったけれど、最後に彼は何の不安もない平和な安らぎに包まれる。つまりこれが収集童話(Kunstmärchen)の救いで、逆に小僧をいじめていた主人は、自宅が火事で灰になり貧乏になっても後ろめたい気持ちのまま、それからまだ何年も生き続けなければならない。

小僧を虐待していた主人は心のどこかにいつもそれに対する認識はあったものの、止めることができなかつた。弱者をないがしろにしたり、いじめたりする人の多くは恐らく根底で彼と同じ様な気持を抱いているのではないだろうか。いじめる側は最初悪いとは知りながら、二度三度と繰り返しているうちにそんな感覚も徐々に麻痺し、いじめは更にエスカレートしていく。まずいと知りながらも、うまくいっているうちは決して止められないのが人間の常で、事件が発覚して逮捕されたり、相手が自殺しない限り、甘い汁を吸い続けた者が己の非を自覚することなどなかなか難しい。それでもまだ実際自己保身に汲々とし続ける醜い人間の姿を我々は数多く見せつけられている。地位が人を作ったのは遠い昔のことで、この頃は地位によって墮落する人の方が多いのではないか。

1843年グリム童話第5版からKHM185に入れられたこの物語の出典は、ルートヴィッヒ・アウエルバッハが1834年に出した「青少年のための本」に掲載された「哀れなみなしごの生と死」(Des armen Waisen Leben und Tod)という作品である。この悲劇的に進んでいく物語を更に辿って行くと、ベースとなったのは1520年のL.アプステミウス(Abstemius)によるHecato-

mythium secundum (「ヘカテ神話にしたがって」の意か?) の中の楽しい笑い話に行きつく<sup>(2)</sup>。

台所の料理を大鷹から守るよう妻に言われた人のいい亭主が、それらの料理を糸で結びつけておく。その結果、大鷹はそれらを全部いっしょくたに運び去ってしまったのだ。そこで亭主は妻にぶん殴られる不安のあまり自殺しようと、妻が亭主に食われぬよう用心して毒と書いておいた瓶詰めイチジクを食べ尽くしてしまう。

帰宅した妻に亭主が、どうして自分は死のうとしたのかその理由を話すと、彼女はこの間抜けな男を笑わずにはいられず、彼を許してやったという次第。

ここでは亭主が死ぬこともないし妻にも許されて、幸せな結末となっている。

## 2. 人間の価値

読者(聞き手)は、小僧の突拍子もない間抜けな行動に何度も笑った分だけ、彼の死んでしまう結末に釈然としない気持ちが残るのではあるまいか。小僧は殺人とか強盗といった重大な罪を犯した訳ではなく、たかだか雌鳥や雛を大鷹に攫われたり、籠に入った葡萄を二房食べてしまっただけなのだ。切り刻んでしまった上着は自分のものだし、飲み食いした蜂蜜と葡萄酒は既に死を覚悟した後、毒薬だと思って口にしたものであった。失態をやらかした後の小僧は、そのつど主人に「二、三日身動きもできないほどポカポカなぐりつけられた」り、慈悲も情もなくぶちのめされて「いく日も寝どこから出られなかった」ほど大きすぎる罰を受けている。裁判官に葡萄を持って行く時だって、小僧がそれを二房食べてしまったのは「おなかはペコペコ、のどはカラカラ、いても立ってもいられなかった」のだから、罰せられるべきは食った方ではなく、むしろろくに食事も与えず彼をこき使った主人の方だろう。

裁判官に「葡萄が二つ足りないよ」と言われて、「自分が食べてしまったのです」と素直に白状する小僧は確かに文字も読めず教養もないけれど、どこまでも誠実で屈託がない。彼は「ひよこをみんな一本のひもでつないでおいたら、おおたかにさらわれる気づかいはなかり」と知恵を絞ったり、きざみ台の側では精一杯仕事をしたりと、彼なりに一生懸命だったのである。最後に彼が幸せな気分死に臨めたのは、短い人生であっても誠実に生きたことの証左だろう。

他人への思いやりや優しさ、誠実さは、知恵や知識などよりずっと大切なものなのだ。いかに学問的な知識があろうとも、自己中心的で人を妬んだりおとしめようとする人、優しさに欠けた人は決して救われることがないとこの短い物語は伝えている。

## 3. 「ヨブ記」を思い出して

こんな話を読んでみると、私はすぐに神に試みられた哀れな男ヨブを思い出す。

旧約聖書「ヨブ記」は、ヨブという金持ちで子室にも恵まれた誠実な男を、神の許しを得たサタンが試みるという至って難解な話だ。「ヨブ記」は聖書の中で他のどの話とも趣が違っており、偉大な神の力と一種の御利益について述べた独立した作品なのである。

「ウズの地にヨブという名の人があった。そのひととなりは全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかった」と物語は始まる。ヨブは十人の子と羊七千頭、駱駝三千頭、牛五百頭、驢馬五百頭、そして多くの召使を所有するほどの大金持ち。そんな彼を見たサタンは神に、「所有物全てを失わせれば、彼は神を呪うでしょう」と申し出る。この場面、信仰心の薄い私など理解に苦しむところだけれど、その時神はこの申し出を受け入れて、「見よ、彼の全ての所有物をあなたの

手にまかせる。ただ彼の身に手をつけてはならない」と言われたのだ。その結果、ヨブは全ての家畜を強奪され、召使は殺され、子供たちも大風で潰れた家の下敷きになって皆死んでしまう。それでもヨブは次のように言う。

わたしは裸で母の胎を出た。  
 また裸でかしこに帰ろう。  
 主が与え、主が取られたのだ。  
 主のみ名はほむべきかな。<sup>(3)</sup>

ヨブは罪を犯さず、神に向かって決して愚かなことを言いはしなかった。しかし次にサタンがヨブの足の裏から頭の頂まで嫌な腫れものをもって彼を悩ました時には、流石に「自分の生まれた日を呪う」。神の言われる「彼の身に手をつけるな」とは「殺すな」ということで、病気や怪我はどうやらその範疇ではなかったらしい。

なにゆえ、わたしは胎から出て、死ななかつたのか。  
 腹から出たとき息が絶えなかつたのか。  
 なにゆえ、ひざが、わたしを受けたのか。  
 なにゆえ、乳ぶさがあって、  
 わたしはそれを吸ったのか。  
 そうしなかつたならば、  
 わたしは伏して休み、眠ったであろう。<sup>(4)</sup>

ヨブは歎き苦しんではいるものの、しかし依然として神を呪ったり恨んだりしてはおらず、如何に不幸な目にあおうともどこまでも忠実に神に仕え、信仰心を失わない。次にヨブを見舞いに来る三人の友との論争は長いので省略するが、要するに彼らはヨブがあらゆるものを失ったり病気になったり不幸な目にあうのは、「神に対して罪を犯した」せいだと主張するのだ。何しろ神とサタンとが彼を試みているのだから、ヨブには勿論思い当たる節などある訳がない。私には、この後に登場するエリフという若者の「神は断じて悪を行うことなく、全能者は断じて不義を行うことはない」<sup>(5)</sup>という言葉に、この論争の答が隠されているように思われる。

神は人のわざにしたがってその身に報い、  
 おのおのの道にしたがって、  
 その身に振りかからせられる。  
 まことに神は悪しき事を行われない。  
 全能者はさばきをまげられない。<sup>(6)</sup>

全知全能の神が間違えることはあり得るはずもなく、ちっぽけな人間など及びもつかぬほど神は思慮深く、全てお見通しという訳だ。後半、旋風の中から答えられる神の言葉は素晴らしく、私は遥かな昔これを記述した名も知れぬ詩人のスケールの大きさに感動する。

海の水が流れいで、胎内からわきだしたとき、

だれが戸をもって、これを閉じこめたか。  
 あの時、わたしは雲をもって衣とし、  
 黒雲をもってむつきとし、  
 閑および戸を設けて、  
 言った、『ここまで来てもよい、越えてはならぬ、  
 おまえの高波はここにとどまるのだ』と。<sup>(7)</sup>

最後にヨブは主に答えて言う。

わたしは知ります、  
 あなたはすべての事をなすことができ、  
 またいかなるおぼしめしでも、  
 あなたにできないことはないことを。<sup>(8)</sup>

最後まで神を裏切らず誠実に仕えたヨブは悟りを得、神の思し召しによって再び幸せになるのだ。病気も癒え、彼の全ての財産は二倍になったという。様々な厳しい試練があっても最後に大きな幸せが用意されているのは、根底で素敵なハッピーエンドを鉄則とする収集童話にも通じるものがある。

主はヨブの終りを初めよりも多く恵まれた。彼は羊一万四千頭、らくだ六千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭をもった。

また彼は男の子七人、女の子三人をもった。彼はその第一の娘をエミマと名づけ、第二をケジアと名づけ、第三をケレン・ハップクと名づけた。全国のうちでヨブの娘たちほど美しい女はなかった。父はその兄弟たちと同様に嗣行<sup>しきょう</sup>を彼らにも与えた。この後、ヨブは百四十年生きながらえて、その子とその孫と四代までを見た。ヨブは年老い、日満ちて死んだ。<sup>(9)</sup>

救われるためにはヨブのようにどこまでも神に忠実でなければならず、それはまるで何も知らぬ純真な子供のような状態である。逆に言うなら、邪念を打ち払い無垢な子供のような状態でなければ、人間は救われないのかもしれない。その意味では、純真で決して他人に悪意など抱いたこともなかった「墓に入った可哀相な小僧」も、神によって救われたのではあるまいか。この類話を見るときは、間抜けな主人公の引き起こす滑稽な事件の方に力点があって、殆どの主人公は許されているのに、ここではどうして最後に小僧が死んでしまうのかという疑問が残る。尤も、1834年に出された「あわれなみなしごの生と死」では、タイトルの如く主人公は死んでいるから、最後に小僧を死なせてしまうのは別段グリム兄弟の発案ではない。ただ一つ考えられるのは、吝嗇で意地の悪い主人夫婦と少々知恵は足りなくとも善良な小僧とを明確に対立させることによって、グリムが夫婦の不名誉な生と小僧の安らかな死、そして救済とを一段と強調しようとしたのではないかということである。

悪いことなど何もしていない陽気で善良な小僧の死によって、読者（聞き手）の受ける印象は更に深まっていく。人間は貧しくとも最後まで誠実に誇り高くあるべきで、如何に金持ちであっても卑屈に生きるのはみじめなものである。

#### 4. 類話について

「あっちへ行ったり、こっちへきたりする」ヒヨコを小僧がみんな一本の紐で繋いでおいた結果、いちどきに大鷹に攫われてしまう愉快的な場面は「ほら吹き男爵の冒険」を連想させる。ある湖で三、四十羽の野鴨に出くわしたほら吹き男爵は一発で何羽も仕留めることは出来ないので、バッグに一切れ残っていたベーコンの脂身を犬の引き綱に結わえ付け、それをポイと鴨たちの前へ投げたのだ。

するとです、うれしいでは御座らぬか、一番近くのカモがスルスル泳ぎ寄りパクリと呑んだ。続いて他のカモどももこいつの例にたちまち倣ったのであります。なにしろ結わえてあるのは脂身スベスベの奴ですからして、全然咀嚼消化されずに尻からツルリと出る、すると次のカモがそいつをパクリとやる、するとまたツルリというわけで、つまりそいつはカモども銘々に敬意を表しつつ全群をぐるりと一巡し、なおかつひもからはずれなかった。ひもに通した真珠のように、カモさんたちは数珠つなぎになってくれたのであります。ワガハイいそいそとそれを引き寄せた。カモの数珠つなぎのひもをば、肩から胴に輪に巻くこと六めぐり、ワガハイかくして家路についたのであります。<sup>(10)</sup>

グリム童話に較べれば「ほら吹き男爵」の方が鴨と一緒に空を飛んだり、一羽ずつ首を締めながら自宅に軟着陸したりとはるかに面白いのだが、童話は愉快的話でもまるで短い夢の中での出来事のように素っ気なく表現し、決して男爵のように具体的な数とか時間、そして場所などを明示しないものである。それは何も笑い話に限ったことではなく、人殺しや残酷な場面でも同様なのである。

イタリアのバジレが17世紀前半に書いた「ペンタメローネ」一日目第四話「ヴァルディエッコ」も、グリム童話に影響を与えた作品の一つである。雌鳥を見張っているよう母親に頼まれた愚かな息子ヴァルディエッコは、言うことを聞かぬ鳥に投げつけた木切れが偶然にもその頭に命中し殺してしまう。困っているうち腹が減った彼は雌鳥を焼いて食おうとしたのだが、樽からワインをついでいるうち巨大な猫にそれを盗まれてしまった。ワインの栓を開けっ放しにして猫を追ううち、今度は樽が空っぽになってしまう始末。その上彼は母親の目を欺くべく、そこへ袋から取り出した小麦粉を床一面に撒き散らしたのだ。しかしそれにしても、もう生きて母親に顔向けはできないと考えたヴァルディエッコは、毒だと聞かされていた胡桃の漬物の入った壺を取り出し、それを全て食ってしまう。以前、母親は息子に次のように忠告していたのだ。

「あの戸棚にはね、<sup>うわぐすり</sup>釉薬のかかったきれいな壺があるけど、中に入っているのは恐ろしい毒なんだよ。どんな悪魔がお前の頭に入ってきてそそのかしても、けっしてあれに手を触れるんじゃないよ。もしそんなことをしたら、お前はまちがいなく、かたあい死体になっちゃうんだからね」

「わかったよ。毒なんかにやられるもんか。でもいいことを聞いたもんだ。知らなきゃあさわったかも知れないし、おいらのことだ、いったん食べはじめたら、すっかり平らげるまでやめなかったらうからな」<sup>(11)</sup>

この物語で死のうとした主人公が潜り込むのは墓穴ではなく、大鍋の中である。戻って息子のいないのに気づいた母親は大声を張り上げて悪態をつき、怖れをなした息子は蚊の鳴くような声

で答えるのだ。

「ここだよ、大鍋の中だよ。だけど母さん、母さんはもう二度とおいらの顔を見ることはないよ」

「どうしてだよ」と、あわれな母親が言いました。

「どうしてって、おいら自分で毒を食ったんだ」

「な、なんだって」

グランノニアは大声で叫びました。「どうしてだい。どうしてお前が死ななきゃあならないんだい。いったい誰が毒をくれたんだ」

そこで、ヴァルディエッコはひとつひとつ順を追って、死にたくなるような、もうこの世にとどまっていたくなくなるような、悪行のかぎりをつくしたことを、つぶさに母親に語って聞かせたのです。

これを聞くと、母親はつらく悲しい気持ちになりました。そしてヴァルディエッコを、そのみじめな思いから救いだしてやるためには、どんなことでもしてやろうと思いました。<sup>(12)</sup>

ヴァルディエッコが母親に頼まれた布を彫像に売りつけ、その中に隠されていた金貨の壺を見つけて大金持ちになる後半はまた別の物語で、むしろグリム童話の「うまい商売」(Der gute Handel: KHM7)によく似ている。この幸せな結末は前述したL・アプステミウスの笑い話の影響が大きいのではないかと思われる。

また、ヴァルディエッコが栓を閉め忘れて樽が空になり、その後こぼれたワインの上に小麦粉を撒く場面は、グリム童話「フリーデルとカーテルリースヒェン」(Der Frieder und Catherlieschen: KHM59)に影響を与えている。いかにもドイツというべきかこちらの樽に入っているのはワインではなく麦酒であった。カーテルリースヒェンが地下で樽から缶に麦酒を注いでいた時、犬が鍋の中のソーセージを食べてしまうかもしれないと思って上に行ってみると、案の定その通りになっていた。彼女は畑まで犬を追いかけたものの、途中であきらめノロノロ引き返してくる。やはり樽は空っぽになり、麦酒が地下に流れ出していたのだ。こんなことを夫フリーデルに知られたらまずいと思った彼女は、歳の市で買っておいた小麦を思い出してそれを麦酒の中に撒くことにしたのである。

「まったくねえ、節約していいときに節約しておけば、あとでこまった時に役にたつもんだわねえ」

こう言いながら、おかみさんは屋根うらの物おきへあがって袋をおろしてくると、それを、場所もあろうにビールのいっぱいはいっている罐を目がけてほうりつけたので、罐はひっくりかえって、フリーデルの飲料までが地下室にこぼれてしまいました。

「これでいいわ。一つのは、おつれができて二つになるのが当り前じゃないの」

カーテルリースヒェンはこう言って、小麦粉を地下室いっぱいにまきちらしました。この仕事をやってしまうと、おかみさんは、じぶんのしたことがぞくぞくするほどうれしくなって、

「まあ、こんなところがござっぱりときれいになったわねえ」とひとりごとを言いました。<sup>(13)</sup>

ドジで明るく単純なカーテルリースヒェンの巻き起こす滑稽な出来事は聞いた人の笑いを誘い、人から人へと広範囲に伝わっていったのだろう。彼女にはまるで悪意などないし、行動の単

純さは「お墓へはいったかわいそうなごぞう」にも共通する。

色々な事件の後、夫のフリーデルは彼女に「おまえも精だして働かなくちゃいけないよ」と言う。彼女は働こうと畑へ行って、刈る前に食べようか、それとも一寝入りしようかと考えた末食べることにして、その結果、眠気がさして眠ってしまう。

それから、ながいことぐうぐうねてから、目をさまして立ちあがった時には、カーテルリースヒェンは半分はだかで、

「これは、あたしかしら？ それとも、あたしじゃないかしら？ まあおどろいた！ あたしじゃないんだわ」と、ひとりごとを言いました。

ねていた間に夜になったので、カーテルリースヒェンは村へかけこむなり、じぶんの御亭主の家の窓をたたいて、

「フリーデルさんですか」と呼んでみました。

「なんですか」

「カーテルリースヒェンさんはお宅においででしょうか、ちょいとうかがいたいのですが」

「おりますとも」と、フリーデルがへんじをしました、「横になって寝ているだろうと思います」おかみさんは、

「わかったわ、そんなら、あたしは、きつともうお宅へ帰<sup>うち</sup>ってるのだわね」と言って、どこかへかけだして行ってしまいました。<sup>(14)</sup>

カーテルリースヒェンであるはずの自分がもう既に夫の家で横になっているのだとしたなら、家の外に立っているもう一人の自分とは一体何者なのか。自分はどうして自分以外の人間ではなく、自分という一つの肉体の中に押し込まれ続けているのだろう。カーテルリースヒェンの最後は、愉快な中にも「自分とは何か」といった一種哲学的命題すら提起していると私には思えるのだ。

子供はよく姉さんや弟を欲しがったり、自分はひょっとしてこの家の子じゃないのではないか・・・といった不安を抱くことがあるものだ。あるいは子供の頃に、もっと優しい人が親だったらよかったのとか、妹や頼りになる兄が欲しいと願ったりと、ないものねだりをしたことのある人は多いのではないか、自分はどうしてこの家の子で、あの家の子ではなかったのかと。そんな素朴な命題をもカーテルリースヒェンは面白おかしく伝えている。もし自分以外のもう一人の自分が家にいて親に可愛がられているとしたら、幸せな小さな子供の胸によぎる不安はとても大きいに違いない。童話のこんな問題提起によって、ひょっとすると子供は自分が自分であって良かったこと、そして親もやはり同じ親で良かったことをさりげなく認識することができるかもしれない。

1819年第二版から童話に入れられたこの話の類話は、それこそヨーロッパ中に広まっているのだが、日本にもこの最後の部分と似たような話がある。熊本県球磨郡の吉四六話の例と、同県八代市の彦市話の二つがあるものの、これらが果たしてヨーロッパから伝わってきたものかどうかはよくわからない。日本昔話事典から「草葉の蔭」のあらすじを引用しよう。

吉四六は侍を一番こわがっていた。ある時、里芋畑にいて、こんな時に後からばっさりやられては困ると思っていた。その時風か何かのために里芋の葉で首を一打ちされ、それを侍に殺されたと思ひこみ、死んだまねをしているうちに日が暮れてから目が覚めた。ここは地獄か極楽かと

案じながら家にたどり着き、馬小屋の草積みの蔭から家の中をのぞき見た。女房は相変わらず仕事をしており、子供もいる。そこを女房が見つめて、吉四六に何をしているのか問うと、吉四六は草葉の蔭から見ていると返事をした。<sup>(15)</sup>

更に「お墓へはいったかわいそうなござう」が毒の入っている壺の中身をすっかり食べ尽くしてしまう個所も、日本の狂言「附子」と同じである。山一つ向こうに所用あって外出する主が、太郎冠者と次郎冠者を呼び寄せて言うのだ。

これは附子というて、あの方の吹く風に当たってさえ、そのまま滅却するほどの大毒な物じゃ。そばへ寄らぬように、よう留守をせい。<sup>(16)</sup>

しかし留守番をするうちに附子が実は毒ではなく砂糖であると気づいた二人は、それを全部食べてしまう。二人は食った後で、つまりヨーロッパの類話とは原因と結果が逆転しているのだが、主の大切な掛け物を引き裂き、同じく高価な茶碗を打ち割っておく。そして、帰って来た主に、大事な掛け物と茶碗を壊したため附子を食べた死のうと思ったと二人が泣きながら説明する場面はとても愉快だ。

太郎冠者：一口食えども死なれもせず、次郎冠者：二口食えどもまだ死なず、太郎冠者：三口四口、次郎冠者：五口、次郎冠者：十口あまり、太郎冠者・次郎冠者：皆になるまで食うたれども、死なれぬことのめでたさよ。アラ、頭かた<sup>かしら</sup>や(壮健の意)。主：なんの頭かた(なんだって、頭かたということがあるものか、の意)。太郎冠者・次郎冠者：アア、ゆるさせられい、ゆるさせられい、ゆるさせられい、ゆるさせられい。主：アノ、横着者、捕えてくれい。やるまいぞ、やるまいぞ、やるまいぞ、やるまいぞ。<sup>(17)</sup>

「ゆるさせられい、ゆるさせられい」と退場する二人を、「横着者、捕えてくれい。やるまいぞ、やるまいぞ」と追い掛ける主の姿には笑ってしまう。ここでは死ぬ者など誰もおらず、附子という名の毒をめぐっての主と二人の冠者の滑稽なやり取りがテーマとなっている。附子とはトリカブトから作る猛毒らしく、その外見は水飴状のドロリとした黒砂糖によく似ているという。

私は子供の頃、似たような話を一休和尚の「とんち話」として読んだ記憶があったので調べてみると、江戸前期に出た咄本「一休閑東咄」(小利大そんのこと)や「一休諸国物語」(一休若年の時師匠のあめつぼをわり給ふ事)に載っている話であった。それ以前に遡れば、鎌倉後期の説話集「沙石集」(梵舜本巻八・十一「児の飴くヒタル事」)にも「山寺の坊主」と「一人アリケル小児」の話として収められている。一部を引用しておこう。

或山寺に、慳貪<sup>けんどん</sup>なる房主ありて、粘桶<sup>あめおけ</sup>を一つもちて、只一人ある小兒<sup>こちご</sup>にいささかもくはずして、是は人のくへば死ぬ物ぞとて、ただ一人くひては、よくおきおきしけるを、此兒いかがして是をくはましと思ひて、房主他行のひまに、たなに高くおきたるをとるほどに、髪にも小袖にもうちこぼしてつれたりけり。日比べほしほしと思ひけるままに、能能二三盃くひて、房主の秘蔵の水瓶を、雨だりの石に落してうちわりて、房主の帰りたる時、しくしくと泣く。何事ぞ、けしからずのなきやうやといへば、あさましき事の候。御水瓶をあやまちにうちわりて候時に、いかなる御勘当もやと思ひ候て、命いきてもよしなく覚えて、人のくへば、死ぬると仰せられ候物を、



一盃たべ候へども死なれ候はず。二三盃たべつれども死なれ候はず。髪にも小袖にもつけて、死なんとし候へども、すべて死なれ候はずといひける。慳貪なるはまさる損也。少しくはせたらば、水瓶はわられじかし。兒の心が賢かりけり。<sup>(18)</sup> (後略)

「沙石集」の成立は弘安6年(1283年)で、1636年頃に成立した「ペンタメローネ」よりはるかに古いのだが、しかしこの仏教説話が日本からイタリアまで伝わっていったとは考えにくく、話の滑稽な中核部分はやはり大昔に大陸から伝わって来たものであろう。ユーラシア大陸から日本への文化伝播は、現代人が思っているよりもずっと遠い昔から続いているのだ。紀元前330年頃のアレキサンダー大王の遠征によって西アジアからインド西部にまで広まったヘレニズム文化は、法隆寺の緩やかな膨らみを持つ柱にまでギリシャのエンタシスという建築様式で影響を及ぼしているのではないか。

古墳時代(3世紀末から7世紀頃まで)の日本は既に朝鮮半島から様々な文化的影響を受けており、それは日本神話の中にも明確に見てとれるのだ。怪獣退治をして美姫アンドロメダと結婚するペルセウスなど、八岐大蛇を殺して櫛名田比売くしなたびめと結ばれるスサノオノミコトと瓜二つである。ヒントになるのは、紀元前6世紀頃黒海周辺に定住し始めていたギリシャ人たちと、遊牧騎馬民族スキタイ族(Skythai)との交流である。スキタイ人たちはギリシャ商人から買物をし、更にはギリシャ文化の影響を強く受けたらしく、王たちの墓からはギリシャの品物が沢山掘り出されるという。

それらの品物には、ギリシャ神話の有名な物語の場面や、ギリシャ神話の神さまがえがかれていることがおおく、そのことからスキタイ人の王たちが、ギリシャ神話に強い興味をもっていたことがたしかめられます。<sup>(19)</sup>

元々スキタイ文化の影響を受けた遊牧民たちが中国北東部から来て建てた国が古墳時代の日本と交流のあった高句麗と百済であったのだから、この時代にスキタイ文化は既に朝鮮半島に定着していたのである。

そのスキタイ人の文化がつつわっていた朝鮮半島と、古墳時代の日本は深いつながりを持っていたのですから、その時代につくられた日本の神話はどうぜん、朝鮮やスキタイの神話から強い影響を受けたにちがいないと考えられます。もしそうならスキタイ人によく知られていたギリシャ神話のさまざまな話からの影響を、日本の神話がうけていてもふしぎではないと思えるのです。<sup>(20)</sup>

「沙石集」や狂言「附子」への影響が果たしていつ頃であったのかを判断するのは難しいけれど、いずれにしても神話と同じ様な流れで日本にまで伝えられたものと考えられる。

さて、最後にまたテキストに戻って考えてみよう。何日間も身動きが出来ないほど殴りつけられる小僧の肉体的な苦痛を第三者が想像することはできても、同じ体験をしなければ彼の痛みと恐怖を本当に理解することは難しい。大した失敗をした訳でもないのに、「だんなに殺されるぐらいなら自分で死ぬほうがまし」との結論に至った小僧を、誰も笑うことはできないだろう。他人の目からは大した不幸とは見えなくとも、その重さは個人の中でそれぞれに違っているのだから。江戸小咄にも、生きていけるうちは僅かな金でも絶対に貸さないのに、その人が自殺してしま

うと（人々は）「あんな少しの金で死ぬなんて馬鹿な奴だ」というのがあった。やはり「不幸な家庭は、それぞれに不幸」というのは本当のようなのである。

#### 註

- (1) 金田鬼一訳「グリム童話集」(五)。岩波文庫。1979年。
- (2) J. Bolte/G. Polivka: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm: Band 3. Olms-Weidmann. Hildesheim. 1992.
- (3) 旧約聖書。日本聖書協会。1987年。「ヨブ記」第1章21節。
- (4) *ibid*(3). 第3章16—19節。
- (5) *ibid*(3). 第34章10節。
- (6) *ibid*(3). 第34章11—12節。
- (7) *ibid*(3). 第38章8—11節。
- (8) *ibid*(3). 第42章2節。
- (9) *ibid*(3). 第42章12—17節。
- (10) G.A. ビュルガー編「ほらふき男爵の冒険」。新井皓士訳。岩波文庫。1983年。
- (11) G. バジール「ペンタメローネ」。杉山洋子訳。大修館書店。1995年。
- (12) *ibid*(11).
- (13) *ibid*(1). (二)。
- (14) *ibid*(13).
- (15) 稲田浩二・他編「日本昔話事典」。弘文堂。昭和52年。
- (16) 小山弘志校注「狂言集」上。岩波書店（日本古典文学大系42）。1960年。
- (17) *ibid*(16).
- (18) 筑土鈴寛校訂「沙石集」下（十六 慳貪者の事）。岩波文庫。1943年。
- (19) 吉田敦彦「日本人の心のふるさと」。ポプラ社（ポプラ社教養文庫4）。1990年。
- (20) *ibid*(19).

Text: Brüder Grimm. Kinder- und Hausmärchen. Band 2. Philipp Reclam Jun. Stuttgart. 1980.

#### 参考文献

- 稲田浩二・他編「日本昔話通観」第31巻。同朋社。1978年。
- 関敬吾「日本昔話集成」。角川書店。1953年。
- 橋本朝生「狂言の形成と展開」。みずき書房。平成8年。
- Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Band 3. Philipp Reclam Jun. Stuttgart. 1980.
- Hermann Gerstner: Brüder Grimm. Rowohlt. Hamburg. 1973.
- H.J. Gelberg (Nachwort: Alte Märchen der Brüder Grimm. BELTZ&Gelberg. Weinheim. 1985.
- Heinz Rölleke: Die Älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. FONDATION MARTIN BODMER. CO-LOGNY-GENEVE. 1975.